瑠璃を見たひと

伊集院 静

瑠璃を見たひと

伊集院　静

角川書店

瑠璃を見たひと

平成4年9月10日第2刷発行

著者　伊集院　静　印刷所　大日本印刷株式会社　製本所　株式会社宮田製本所
発行者　角川春樹　発行所　角川書店　東京都千代田区富士見二―十三―三　〒102
〈営業〉〇三―三八一七―八五二一〈編集〉ザテレビジョン　〇三―三二二六―三八六〇
落丁・乱丁本は小社通信販売課にて送料当社負担でお取替いたします。
©Printed in Japan
ISBN4-04-872705-2 C0093

目次

第一章　道化師の涙壺　5
第二章　饕餮（ターティエ）伝説　39
第三章　青い砂丘　103
第四章　西夏の姫　235
終　章　神戸　339

装幀：長友啓典＋K2
カバーオブジェ：黒田征太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瑠璃（るり）を見たひと

第一章　道化師の涙壺

播磨灘から明石海峡を越えて須磨の海岸を吹いてきた風が、和田岬の工場のけむりを西から東に流して神戸の海を渡っていく。

細いけむりのむこうに淡路島が白くかすんでいる。島の突端が海に落ちる紀伊水道の水平線のあたりから初夏の雲が大阪湾の上にのびている。

その雲を割るように、正后過ぎから五月の陽差しが薄ぐもりの続いた神戸の街に差しこみはじめた。時間が経つほどに海の色がゆっくりと深味を増していく。

暎子はもう二時間余り二階の窓辺にたたずみ、海を見つめていた。窓際のサイド・テーブルに置かれた午后の紅茶は、とうに冷めてしまっている。

明るい声が聞えた。窓の下を見ると、諏訪山にむかう坂道を数人の女子大生たちが笑いながら歩いていた。つい先月までコートの襟を立てて寒そうに往き来していた彼女たちが、今は身軽になってライトブルーやピンクのはなやかな色味の服装に変わっている。どの顔も春をふくんで初夏へむかう季節にだかれてのびやかに見える。彼女たちはきっと今が一番まぶしく見える年頃なのだろう。

その坂道の左下にある相楽園のつつじの緑が日毎に濃くなっている。

部屋に流れていたフランソワ・クープランのピアノソナタが終りに近づいた。海からの風が暎子の長い髪を撫で、葡萄色のセーターの胸元に揺れた。

船笛がかすかに耳に届いた。

中突堤を離れた客船が、湾の中央で船首を一八〇度変えながら、外海へ出ようとしていた。

――あの船は、どこへ行くのかしら……。

暎子は、雲間から垂直に差す陽差しを反射させながら港を離れようとする船を見てつぶやいた。

海は先刻より、青を深めている。

海沿いに住んでいると、光と風の戯れに、空と海と雲が不思議な光景を作り出すのを見ることがある。

この季節、薄ぐもりが続いていても、夕暮れになる少し前にほんの一瞬だけ陽差しが雲を割ってあらわれる時がある。春から夏に変わる数日と秋が終ろうとする数日、海を眺めて過す人なら一度は見たことがある美しい光景である。

〝道化師の涙壺〟、叔父の島本周輔がそのつかの間の陽差しのことをそう呼んでいた。若い頃に英国に留学していた周輔は、ドーバー海峡沿いの港町で毎日ひなたぼっこをしている老人からその名称を聞いたという。

「どうして〝道化師の涙壺〟と呼ぶの？」

暎子は叔父に聞いたことがあった。

「いつも人を笑わせるのが道化師の仕事だろう。しかし、彼等だって人間だもの、哀しい時だってあるさ。でも道化師は人前で泣いてはいけない。そんな時は誰もいない場所でひとりでそ

っと涙をこぼすのさ。そのこぼした涙さえ、小さな壺にしまっておくという話があるんだ。人生の終末を迎えた老人たちへつかの間当る陽差しを、道化師が人間にかえるわずかな時間をつつんでやる壺のやさしさにたとえたのだろうよ」

まだ十代だった暎子は、叔父の話を聞いていて、物陰に隠れてひっそりと泣いている道化師のうしろ姿を思い浮かべたことがあった。

その〝道化師の涙壺〟が今暎子の目前にあらわれ、刻一刻と海の色を変えている。

薄ぐもりの空を映して白くかすんでいた海が淡いグレーになり、雲が割れて陽差しが増すたびにさざ波がその陽差しを跳ね返して濃いグレーに変わる。やがて雲間から青い空がのぞくとグレーは墨を落したような黒になり、黒から藍色に移り、雲が千切れていくと藍色から群青色になって、暎子の視界の中にあふれ出した。

夫の賢一郎は、今夜も帰宅が遅いのだろう。

日曜日の夜、今週はずっと遅くなると賢一郎から聞かされた。来月に大阪で開催される世界貿易フェアーの理事の役が今年は自分に回って来たと、夫は愚痴をこぼしていた。

「あまり遅いと、そのまま泊ってくるかもしれないな」

賢一郎はゴルフのクラブを磨きながら言った。夫はこの頃、暎子に伝えたい話をする時、ひとり言をつぶやくように話す。

結婚して七年、賢一郎と暎子の会話は、いつの間にかそこに存在しない第三者にむかって話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すような会話になっていた。

――今週は帰らない日もあるのだわ。

暎子は賢一郎の顔を思い出そうとしたがうしろ姿しか浮かんでこなかった。

彼女は少女の頃から口数の少ない子供だった。相手の話に相槌を打ったり、表情をこさえて反応することができなかった。

臆病な少女だった。庭に飛んで来る小鳥にさえ、じっと見つめられると足がすくんでしまった。いつも物陰に隠れて何かを見つめるような子供だった。

「大丈夫だよ、出て来てご覧」

父の英輔が、そんな暎子を笑って手招いた。

「怖がりでいいんだよ。女の子はその方がいい。臆病でいいんだ。それでも暎子の目は、自分でちゃんと歩いて行かなきゃならない時には、しっかりと歩いて行ける意志の強い目をしているよ。母さんの血が皆暎子に行ってしまったんだろう。綺麗な目をしている」

まだ若くて元気だった父は暎子を膝の上に乗せて話してくれた。

「ほら、あの海を見てごらん。あの海は世界のどこにでも続いているんだ。おまえが望みさえすればどこにだって行けるのさ」

暎子は父の声を耳元で聞きながら、大倉山にあった実家のテラスから神戸の海を見つめてい

た日を憶えている。
暎子は二十五才の時に賢一郎と見合い結婚で一緒になった。
賢一郎は明治時代から神戸にある老舗の貿易会社の一人息子であった。
二人がホテルではじめて顔を合せた時、賢一郎を気に入ったのは、暎子が十一才の時に父のもとへ後妻としてやって来た和子であった。
「暎子さん、あの方は誠実そうよ。あの方の、相手を見る目を見て母さんわかったわ。きっといい方よ。それに滝尾家と言えば、神戸でも良家だと聞いたわ」
暎子は賢一郎が、和子が言うほど誠実そうには思えなかった。
見合いが終った後、暎子は和子と一緒に入院している父を見舞った。和子はよほど相手が気に入ったと見えて、父に賢一郎のことを賞めちぎっていた。
父は和子の話を窓のむこうに広がる神戸の街を眺めながら聞いていた。
病室で二人っきりになった時、父は暎子の手をそっと握って言った。
「暎子、どうだったんだ?」
暎子は父が自分を心配してくれていることより、力のないやつれた手の方が気がかりだった。
「どんな人だったんだ」
「……」
暎子は黙っていた。

「嫌なら別にいいんだよ。ずっと家に居ればいい。それに……」
「それに何？」
「結婚をしても、嫌な男ならすぐに帰ってくればいい」
　暎子が笑うと父も笑った。
「痛風は我慢が肝心ですよ。ちゃんと看護婦さんの言うことを守ってる？」
　父はうなずいた。
　しかし英輔の病は痛風ではなかった。一か月前から背中や腰に激痛が襲っていた。それは癌の末期症状であった。
「父さん、私も相手の方を気に入ってるの」
　そう答えた暎子を、英輔はじっと見つめた。娘の心の底をのぞこうとする父親の目だった。
　暎子は微笑んだ。
「そうだな。夫婦というものは、暮しはじめると案外と上手くいくものだ」
「麗美母さんともそうだった？」
　暎子は母のことを聞いた。
　病気がちだった母の麗美と遊んだ記憶はわずかしかない。
　その時、和子が病室に戻って来た。
「ねえ、それで暎子さんの気持はどうなの？」

「私は気に入ってよ、母さん」
「本当に？　暎子さん。母さん、嬉しいわ。こんなに嬉しい日は今までになかったわ。賢一郎さんはいい方ですものね。ねぇパパ、これでもうひと安心ね」
急に明るくなった和子は、式の日取りから式場の段取りまでひとりで話しはじめた。父は窓に映る海をじっと眺めていた。
その英輔も亡くなり、去年の暮れに七回忌を終えていた。父は暎子のウエディングドレス姿を目を細めて見つめてからほどなく他界した。
暎子と賢一郎は下山手のマンションで新婚生活を二年過し、賢一郎の父・滝尾順一郎が滝尾交易の社長を退き会長職に就いたのを機に、諏訪山にある洋館に居を移した。
暎子は屋敷の二階に海の見える部屋をもらった。窓を開けた時、神戸の街と海が一望できる部屋が気に入った。
実家の大倉山の庭先からも海が見えていた。横浜の大学に通っていた時も父は暎子の住居を山手の海の見える場所に選んでくれた。
海を見ていると不思議に心がなごんだ。力がわいて来るような気がした。哀しいことがあると、海を見ながら時間が通り過ぎていくのを待った。そうすると不安や恐れが消えていった。自分が自由になれそうな予感がした。
転居してから五年余り、暎子はほとんどの時間をこの部屋で過していた。

子供ができなかった。どちらのせいかわからなかったが、それを診てもらうほど暎子は賢一郎の子供が欲しいとも思わなかった。

賢一郎に抱かれても、自分を忘れてしまうほどのセックスは経験しなかったし、新婚当初のように賢一郎も執拗に暎子の身体を反応させようとしなくなっていた。

――不感症

その言葉を夫が口にしている気がした。

それでも七年の歳月は、淡々と流れていった。

賢一郎は毎日会社へ出かけ、年に数度海外出張し、月の三分の一は東京、大阪へ行き外泊をする生活だった。たまに家へ帰って来ても、週末はゴルフか、芦屋の友人の家へカードをしに出かけた。

新婚当時、暎子も賢一郎に誘われて芦屋へ出かけたことがあった。

しかし暎子には、その遊び場の雰囲気がなじめなかった。薄暗い照明の中で男たちはカードに興じ、カードをしないものはソファーに身をあずけて酒を飲んでいた。

そこにいた男も女も、自分とまったく違った世界の人間に思えた。まるで洞窟の中に棲む爬虫類に見えた。

「賢一郎のワイフは美人ねぇ」

紫のロングドレスを着た化粧の濃い女性が暎子を嘲るような目をして言った。女性の歳は暎

子と変わらないように見えたが、彼女の立居振舞いには熟女のような妖しさがあった。
夫は女の声に気づいて笑っていた。暎子はその時、自分が夫の過去も外での顔も何ひとつ知らないことに、はじめて気づいた。しかしそれを知ったところで、賢一郎をより理解できるとも思えなかった。むしろ知らないでおく方が自分のためのように思った。
二人の生活は、何事もないように過ぎていた。
ただこの半年、暎子は自分がひどくむなしく思える時があった。自分の人生がこのまま過ぎていくことが、たまらなく不安になる。
この屋敷の中には普通の主婦たちが手にすることのできない贅沢な環境と時間がある。なのに暎子は両手で自分を抱いて、床にうずくまる時があった。
ふとした拍子に不安は襲って来る。たとえば、ガラス窓に映った自分の姿を見た瞬間にやって来た。
そこに映っている女が誰なのかわからなくなる。
——誰なのあなたは？
もうひとりの暎子が低い声で問いかける。その声に暎子は答える。
——滝尾暎子。三十二才。
——それで？
低い声はさらに続く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com